
『家族』と外からの来訪者

由美夢弍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『家族』と外からの来訪者

【Nコード】

N8390T

【作者名】

由美夢弍

【あらすじ】

主人公、竹田君孝は両親が死んで、遠戚の叔父の家に引き取られる。

しかし、そこには三人の姉妹がいた。

元気いっぱい優しい長女、由宇

家族思いのツンデレ次女、京

何を考えているのかわからない不思議系三女、千紀

彼女たちと育む『家族』の輪の物語

赤崎三姉妹

「きーくん、おはよう！」

可愛らしい女の子の声で起床、俺はつい一週間前までは一人っ子だった。親父とお袋が交通事故に巻き込まれて、遠戚の赤崎家に引き取られたのだ。しかし、そこには三人の美少女がいた。

「何をポーっとしてんの。早くしないと、遅刻しちゃうよ！」

長女の赤崎由宇。俺の一歳上で今年で高校二年生だ。俺がこの家に引越してきて、すぐに俺の存在を受け入れてくれた人だ。俺の背よりも十センチ近く低く、すっごい強いクセ毛に、頭の前からはアホ毛が一本伸びている。顔面偏差値、八十二点だ。

ちなみに、顔面偏差値とはその言葉の通り、女性の顔だけで、つまり第一印象だけでどれだけ可愛いかを判断したものである。平均は五十点だから、由宇はかなりの高得点である。

「ごめんなさい。寝過ぎしてしまったみたいです」

「まあ、あと家出るまでに三十分はあるから余裕で間に合うけど、早くリビングに来てね！」

「はい」

俺は由宇がドアを閉めたのを確認したのちに、ベッド脇にかかっている制服を取り出す。この制服を着るのは初めてだ。両親が死んで、引越して六日間は葬式の後始末やらの手伝いで忙しかったからな。転校で旧友と別れることになったのは悲しかったが、うれしいこともある。新しい高校は、以前の男子校とは違って、共学なのである。

「よし、絶対に彼女を作ってやるぞ」

俺は意気込んで自分にそう言い聞かせながら、着替えを済ませて階下に降りる。

「おはようございます」

俺がリビングに着いた時には、すでに他の『家族』は席についていた。俺はその光景に遅れてしまったことに、入りにくさを感じる。俺はまだ所詮、一週間程度しかこの家にはいない人間なのだ。十数年を共に過ごしてきた彼らとの壁を感じるのは仕方のないことなのかもしれない。

「ちよつと待っててね」

俺の……彼女たちの『母』、赤崎梅さんがご飯とみそ汁を出すために立つ。俺はその行為に頭を垂れたまま見つめる。

「ねえ、早く座ってよ。テレビが見えないんだけど」

次女の赤崎京。年齢は全く同じの同級生。由宇とは年子だ。俺がこの家に引越してきたことを、かなり快く思っていないようだ。俺がすることにことある毎に突っかかってくる。正直、苦手だ。黒髪のまっすくなストレートをクセ毛の由宇はうらやましそうに見つめることが多い。顔面偏差値は悔しいことに八十点。

「あ、ごめんなさい」

俺はすぐに謝って、その場から退けて、この『家族』が設けられた席に着く。

「また、敬語お？」

彼女は頻繁に、その点について突っかかってくることが多い。確かに家族内に敬語が存在すれば、家庭の環境は随分、暗くなってしまうだろう。俺だってそんな奴を『家族』にしたいとは、微塵も思わない。

「すいません」

そうは思うものの、この状況に引け目を感じ、俺は結局敬語で反応してしまう。これはかなり悪い傾向である。

「だから、それが敬語なんだってば！」

今日は自分の箸を持っている方の手を机に叩きつける。机が一瞬、ガツと揺れる。そして、彼女は鋭い目つきで睨みつけてくる。

「以後、気を付けます」

「ワザとやってんの、アンタ？」

完全に呆れ顔である。確かにここまで来たら、俺自身でもこれぐらいは怒っても当然かな。と思いつつ、

「いえ……」

「じゃあさ、ウチの空気を壊さないでくれるかな？」

「いい加減にしないで！」

由宇さんがこの空気に耐えかねて怒る。

「たりに、行ってきます」

京はそう言っ、席を立てリビングの端に転がっている鞆を引っ掛けて学校へ行ってしまふ。まだ、ご飯も味噌汁も半分以上残っている。

俺は気まずい空気の中で食卓に着く。

「気にしなくても、いいんじゃない」

三女の赤崎千紀。彼女も俺と同級生。しかし、京とは双子ではなくて、十一か月差生まれである。いつもクールで話したことはほとんどなく、俺の事を快く思っているのか、っ嫌っているのかすら全く分からない。ツインテールをリボンでくくっている。顔面偏差値は七十九点。

「そうですね、気にしなくてもいいですよ」

俺は千紀の発言に賛成して、ほっとする。この空間でも少しだけ居心地がよくなった。

「でも、敬語を止めてほしいのには同感」

千紀は言いたいことは言い終わったかのように、手を合わせてこ馳走様と呟くと、行ってきますとだけ告げて出ていく。

食事は結局何となく居心地が悪くて、半分ぐらいしか食べられなかった。

赤崎三姉妹（後書き）

初投稿です。

週に二、三回のペースで更新をしていけたらいいなと思います。
拙い文章ですが、何卒よろしくお願いします。

勝手な他人紹介

「京、知ってる??」

私が席に着くと、自称情報通の友人である明日菜夕子あすなゆづこが私に笑顔で話しかけてくる。雰囲気からして、おそらく新しく手に入れた面白情報だろう。まあ、大概は私には関係ないけどね。

「さあ、何の話??」

私は正直に首を振る。彼女はそれを見て、満足をしたように不敵な笑みを浮かべてこちらを見る。

「教えてほ・し・い??」

「いや、別に」

「つて、即答かい!!」

私と彼女はコンマ数秒の速さで、このやり取りをする。いい加減、この流れは固定だなあ。なんて最近は思っていたりもする。

「でも、私は聞きたいな」

不意にもう一人の友人である浅野蛸あさのほたるが話に割り込んでくる。大抵は私を含むこの三人で行動をすることが多い。

「やっぱり、蛸は京とは違って、わかってるなあ。京とは違って!

「!

「何故に、二回繰り返したんだよ。まったく持って、面倒くさいな

「あ

「強調構文ってやつさ」

夕子はどこにもない、その胸を全力で反らして自慢げに語る。

「それって、” It is that ” の文のこと??」

「……………」

二人の無言。

「え、え、どうしたの??」

彼女は焦っている。これはよくある光景だ。彼女のツッコミは何と言つか、的が外れている……生真面目と言っかな。

「さて、本題だ！」

夕子が再び議題を元に戻す。

「なんと、転校生がこの学校に来るらしい!!」

夕子は再びそのない胸を反らして、みんな知らないでしょうとう顔で言う。

「本当に!!」「あっそ」

対照的な反応。

「なんだよ、京はそっけないなあ。相手はイケメンかな??とか思わないわけ??」

「いや、全く。ってか、そいつと一緒に暮らしてるし」

「そうだよ、京ちゃん、そのイケメンとできちゃうかもってええええええええええええええ!!」

「どういう意味だよ、京。それって、ド、。、。、同棲……?」

二人は全く理解をしていない様子で、大慌てである。

「お前の”ど”の変化の意味も気になるが、そういう関係ではないよ」

「京ちゃんはそういう関係ではない人とでも、その……キスとかするような人だったんだ」

蛸はすごく怖い真面目な顔で距離を置こうとする。

「いや、単なる居候。両親が死んだから、ウチで引き取ったの」

「……」「……」

二人は沈黙する。

わたしはそう思うと、アイツの両親が死んだからということでも、まったく気を使ってなかったなと振り返る。

「そんな気にしなくてもいいよ、アイツはぶっきらぼうだし、そういうのを気にされる方が嫌がるからさ」

「そうだよな」「そうだよね」

二人は同意を示す。

「ところで転校生はどんな奴なんだ?」

夕子が興味津々で問いかけてくる。

「そうだな……友達は少なそうで、家族になつたのに敬語だし、正直絡みづらい雰囲気の陰キヤだね」

「ルックスは？」

蛍がこれまた興味津々に聞いてくる。

「まあ、イケメンじゃないかな、一応だけど。ただ、話してみるとそうでもないよ。顔だけだよ」

「でも、イケメンかぁ」

蛍がイケメンという言葉に顔を輝かせる。蛍はジャーネーズとか大好きだからな、イケメン主義っていうか、顔しか見ていないっていうか。蛍はかわいいとは思うけど、その辺の好みは私とは全く違うな。私は人は顔では絶対に選ばない、一緒にいて楽しいやつの方が、ダサくても数倍はマシさ。

私たちがそんな会話をしていると、不意にドアが開きアイツが入ってくる。

「こんにちは、このクラスに赤崎京さんはいらっしやいますか??」

勝手な他人紹介（後書き）

二話目の投稿です。

前回よりもスムーズに執筆できた気がするなあ、なんて思っている作者です。

前回より読んでいる方であれ？と思っている方、訂正します。

本作品はきーくんと京の二人の視点を交互にしていく予定です。ですから、次回はきーくんといった感じですよ。

次回の更新は月曜日か火曜日にしようと思います。

これからもよろしくお願ひします（二話目ですよ）

転校初日

「こんにちは、このクラスに赤崎京さんはいらっしやいますか??」
俺は勇気をもってそのドアを開ける。

新しい学校、友達はい人もいない。「家族」はいるけど、それもまだまだ希薄な関係。俺は一人ぼっちでこのドアを開ける気持ちでいた。

「……………」
ドアを開けた途端、クラス中が沈黙になる。

俺はやってしまった。転校生が突然、クラスメイトの名前を呼びながら、入ってきたら確実に変だ。でも、仕方ないじゃないか……京が弁当を忘れるんだから。

俺がそうこう思っていると、

「こつちこつち!」
そう言つて、俺に手を振ってくる女子、髪を後ろでひとくりに結っている外見から、体育会系だろうと推測する。顔面偏差値は53程度かな。その側には京がいた。

京は明らかにムスツとした表情で、俺の方を睨み付けている。朝にあんなことがあったのだから、仕方ないかとは思うけど、少し怖かった。

俺はその京の前へとまっすぐに歩み寄る。その道中、クラス中の視線を俺は全身で感じる。

「コレ、忘れていました」
俺は京の弁当の入った手提げ鞆を差し出しながら、やってしまったと思う。またしても、敬語だ。

京はそのままのムスツとした顔で、俺の差し出したものを見て奪い取る。

「何コレ?」

「弁当です」

「あつそ」

そつけない態度、確実に呆れられていると俺は肩を落とす。

俺はそういうやりとりの後に、前もって先生から聞いていた席に荷物を置く。

「よう、転校生」

その時に一人の男子生徒に話しかけられる。

「よろしく、俺のことは転校生じゃなくて、きーくんって気安く呼んでくれ」

俺は片手を軽く上げて、挨拶を返す。

「で、お前と赤崎ってそういう関係なのか？」

隣の奴はなのりあげもせず、そんな話を勝手に始める。

「そういう関係って……単なる親戚同士で俺の両親が死……仕事の都合で海外に行くことになったからさ。仕方なく、赤崎家に引き取られたっていうだけだよ」

俺は後々に同情をされるのが、嫌だったのだろうか。嘘を吐いてしまう。

「そうかあ、お前は大変なんだな」

「大変なのは両親だけだな」

「言われりゃそうだ」

そう言って笑う。コイツはいい奴なんだろう。俺みたいな転校生にも抵抗なく話しかけてくれるし、心配だってしてくれる。

「ところで、お前の名前は？」

「ん、俺か？遠山心とこやましんだ、シンって呼んでくれ」

「改めてよろしくな、シン」

俺はシンと固く握手をする。

「んじゃ、俺はHRが始まるから」

シンはそう言って、手を振る。

俺も自分の席に着く。これからもこんな風に友達を増やせたらいいなと思いつつ……

転校初日（後書き）

第三話の投稿です。

前回予告した通り、きーくん視点でのお話にさせていただきました。ちなみにこの話、実際の転校生とは決して異なります。フィクションです。

転校生が一人で教室に来ることはありませんよ!!

先生に連行されて来ます 注意
ですが、ストーリーの都合上でこのような形態にさせていただきました。
した。

きーくんの話は前半は友達作りを優先していこうと思います。

次回は木曜日か金曜日に更新予定です。

次回もよろしくお願ひします

イライラする

イライラする、気に食わない！

転校してきたアイツがウチのクラスにやってきたことはもちろんのこと、アイツがやたらとクラスになじんでいることだ。

お前は最低だなんて言うなよ。アイツは『家族』には敬語のクセに他の人には普通にしゃべっていやがるんだ。

どんだけウチの『家族』を愚弄すれば気が済むんだよ！私はアイツには絶対情けをかけない。アイツは情けでウチのクラスメイトにも入り込んで最低野郎だ！

とりあえず例を見せてやる。これは一限目の出来事だ。移動教室で私がアイツの右斜め前になったとのことだ。

「あの……京。教科書をまだもらっていないので、見せてもらえませんかね？」

当然のことで敬語なので、私はとりあえず無視する。

アイツが大きなため息をついている気がして少しだけ、罪悪感を感じたけど仕方ない。アイツが敬語なんだから。

アイツは私に借りられないと理解するとすぐに隣の女子、蛭に話しかける。

「あのさ、教科書をもらっていないから見せて」

敬語じゃない！私はそれに驚く。蛭も

「うん、いいよ。転校生も大変だね。京も別に嫌っているわけじゃないと思うんだけど、今度は私からしつかり言っておくよ」

アイツはこうして、私の友人の情けを買ったんだ。

どう思う???

皆さん、アイツは最低だと思いませんか？

『家族』にはよそよそしくいながら、他の人にはなれなれしくし

て……このクラスに付け入っているんだ。私は決してアイツを好きにならないだろう。

イラストする（後書き）

今回は少し京の日記風でいこうと思い、そうさせていただきました。
この作品は作者的にもかなり迷走中なのですが、しっかり終わります
で頑張ろうと思います。

俺の過去

転校初日はクラスメイトと仲良くなることができた。

でも、相変わらず、『家族』とは仲良くはできていない……これは問題だ。

原因は分かっている。俺の両親が死んだことをいまだに引きずっているということ、それと彼女たちに敬語を、やめろと言われても続けていること。

でも、こればかりはどうしようもない。

俺は昔、両親とは離れて暮らしていた時期がある。物理的にはなく、心理的になんだけど。

要するに、両親は俺の存在を、そこにあるということを理解していながら、特に何もしない。食事は三食あるけど……会話はない。原因は分かっている。俺が……両親の本当の子ではないからさ

俺の過去（後書き）

今回はかなり暗い話です。

このストーリーのミソ部分ですので、次を期待してくださいと言っておきましょう。

本作品はこれから、終盤に向かっていきます。

多分、キャラを出し過ぎて、無駄に登場した方ばかりになってしま
います……すいません。

来週、再来週は作者の所用で更新できません。

今後何卒、よろしく願います。

『家族』

家出した。

今日、俺は家出をしてしまった。

辛くて、居場所がわからなくなって俺は家出した。

誰も追って来ないだろう。

俺は所詮その程度の存在なのだから……

そろそろ、街の境界線というところ。

俺の目の前に京がいた。

俺の家出の元凶、諸悪の根源。

「何やってんの??」

「こんな朝早くに家を出てさ」

かなりいらついているようだ

「家出」

俺はそう告げると、彼女を無視して先に進もうとする。

「どうして??」

「あの家には、俺の居場所がない」

「そつ……」

「ほかの『家族』にもよろしくを伝えといて」

「このあと、どうすんの??」

「さあ、多分。」

「以前、世話になっていた人のところに行く」

「そつ……」

「私さ、アンタのこと大嫌い。」

「心底、大嫌い。」

「でも、でもさあ、いなくなるとさみしいよお」

「彼女が泣きながら告げる、俺に。」

「俺は所詮、俺は外からの来訪者だ。」

『家族』にはなれない。
「ごめんな」

俺は街を去った、振り返きはしない。
思い出は全て、京にあずけたから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8390t/>

『家族』と外からの来訪者

2011年7月18日03時37分発行